

砂山

二宮英郷

「今日は先週の続きです。皆さんのノートに書いた歌詞を良く見てください。まず、一番だけ歌いますから……」

小泉京子は英語の先生だったが、ピアノが弾けたので音楽の先生も兼ねていた。前奏を弾くと静かに小さな声で歌いはじめた。

砂山の砂に腹這い

初恋の

いたみを遠くおもい出する日

京子先生のあとに続いて栃木県二宮町中学校の音楽室で三年1組の全生徒が歌いはじめた。谷口光太郎は「初恋」の響きに気恥ずかしさを隠しながら、窓の外を見て皆に合わせ口を動かしていた。校庭の周囲は雑木林で囲まれている。視線を上げると遠望に雪を頂いて日光の白根山と男体山が、太陽の光をうけて輝いていた。雄大な男体山が光太郎は好きだった。校庭は百メートルが縦に直線で取れる大きさがある。中央には二百メートルのトラックが、隅には野球のダイヤモンドがあった。

ひと区切りついたところで、先生は何かを決心したようにすっと立って、生徒の顔を見回した。

「皆さん、今日は皆さんとの最後の授業になります。たった、一年間でしたが一緒に勉強できたことをうれしく思います」

突然の知らせで誰も黙ってしまった……。一瞬、凍ってしまった教室の空気を、一番前に座っていた体の小さい田口が和らげた。

「先生、お嫁さんに行くのか？」

「いいえ、東京へ行って就職をします」

東京の短大を出て英語の教員免許を取得して、郷里で先生になったことは、この人口一万足らずの小さな町では名譽な事であるはずだ。が、京子の胸には燃えるものがあつた。

「誰ですか。『ダイアナ』を歌っていたのは。さつき私が教室に入ってきたとき聴こえましたが。お別れに先生に聞かせてください」

「谷口君です」

女子で級長の久保が即座に言った。谷口は恥ずかしがっていたが、「男らしく歌いなさいよ」と、二人の女生徒たちに言われてすつくと立つた。

I am so young and you're so old. This my darling I've been told

I don't care just what they say 'cause forever I will pray

You and I will be as free as the birds up in the trees,

Oh, please stay by me, Diana.....

教室が静まり返つた。歌い終わると、「わあ、すごいわ、じょうずね。ポール・アンカですよ。皆さんが好きな英語の歌を五曲も一〇曲も暗唱することは英語の勉強には最高にいいことです。将来、アメリカやイギリスへ行つて、パーティーに招待された時、日本を代表して英語で歌つたらきつと、その場が盛り上がるでしょうね。皆さん、英語を勉強して世界へ飛んで行ってくださいね。先生からのお願いです」

終了のベルがなつた。

「ちよつなら.....」

京子先生が音楽教室から出ようとすると、女生徒たちは先生を包囲した。

その日、掃除当番が終わり、光太郎は野球部の後輩たちに気合を入れに行こうと窓枠に顎を乗せて外の景色を見ていた。三年生の部活は夏の試合が終わると完了である。その頃から光太郎は、高校受験の最後の追い込みでギヤ・アップして勉強していた。

光太郎の傍に、級長の久保佳子と子分の大塚智子が歩み寄つて来た。恐ろしいほどの気迫を感じた。

平均的に中学三年では、女子は男子よりも成育が早い。

「謝つて来なさいよ、小泉先生に。谷口君があんまりいじめたから、小泉先生、よく音楽室でピアノを弾きながら泣いていたわよ。わたしは級長で毎日職員室に連絡に行くでしょ

う。谷口君が乱暴するから、いつも泣いていたわよ。男らしく謝ってきなさい。明日の朝礼で挨拶して東京へ行っちゃうのよ」

久保にまた「男らしく」と言われては後へは引けない。

「分かった。行ってくる」

光太郎は職員室に入ってほかの先生に小泉先生の所在を聞いた。保健室で残務整理をしているという。

トントン

「ぶっぞ……」

部屋の半分ほどの所に天井から白いカーテンが掛かっかけていて光太郎が入ると同時に揺れはじめ、手前の洗面器に入っている消毒液の匂いが鼻をついた。窓からの午後の光を映したカーテンの中から、小泉京子が出て光太郎を迎えた。

「あら、『ポール・アンカ』さん」

白いベッドが見えた。子供の頃から良く遊びに来て可愛がってくれた京子と、今、ひとつの部屋にいることは、何か大きな得をしたように思えた。急に大人になった気分だった。

たしか小学校一年の時に、京子は中学一年で、夏休みの早朝のラジオ体操では、恒例の出席を取る担当だった。そのころは大きい女だと思っていたが、いま光太郎は身長がメートル六十三センチで京子と同じだった。光太郎の母は旧制下館高等女学校を卒業し、昭和二十四年、新制の高等学校になり、卒業した京子は後輩になる。同じ町内で道路を挟み反対側で老舗の乾物屋を営む店の長女であった。京子は子供の頃から、よく妹たちとピアノを弾いて遊んでいた。その小泉京子が母校の中学の英語教師として郷里に帰ってきたのには心底驚いた。

光太郎の祖父と京子の祖母が従兄弟関係であるから、同じ血が若干は流れていることになる。光太郎の父親は東京で建築士として勤めていたから、光太郎自身は自然に東京へ行くものと思っていた。

「先生、いつ東京へ行くんですか。それから、いままで乱暴してすみません。俺、謝ります」

小泉京子は光太郎の顔をじっと見ていた。

「まだ、いつかは、正確には分からないの……」

「俺、ガキの頃から先生のこと好きだったから乱暴したんだ」

「児童心理学で勉強したから分かってたわ。先生も光太郎が好きよ。東京の大学へ行くんでしょ。秀才が集まる東京で思い切り勉強しなさい。強い男と相撲を取りなさい。あなたはやれば出来るのだから、横道にそれではだめよ。『努力は天才に勝る』って言うじゃない」

このヤロウ、安っぽい能書き垂れて……と思った。

京子先生は光太郎の両手を握った。

光太郎の両耳が熱くなった。心臓が鳴っているのが聞こえた。京子は、顔が真っ赤に染まっていた光太郎を見ていた。光太郎は気まぐらくなって腰を引いた。男根が勃起した。

京子は、そのまま、形良く盛り上がった自分の胸に光太郎の手を持っていった。光太郎の手は自然に動き、京子の真っ赤なセーターの下へ侵入し乳房を揉んでいた。すべすべつるつるしていた。京子が両手で幸太郎の前のボタンを一つづつ外し男根を握った。

「あら、おひげが生えて、赤ちゃんの時はすべすべしてかわいかったのに」「うーっ」

光太郎は苦しげに唸った。次の瞬間、肺の中で熱い空気が蠢き、両手に力が入り乳房を強く握った。乳房がもぎ取られるような激痛が京子の後頭部に走った。京子はたまらず両踵を上げた。と、京子の両手の中でヒクツ、ヒクツと男根が律動しながら精液がほとばしった。ぬるっとして、白く光る液を、両手を開いて見ていた。たゆたう白いカーテンの中で栗の花の匂いが広がった……。

手に持った桜紙に、手のひらの白い光沢は、蚕が桑の葉を食むように花卉を描いていた。

「光太郎、東京で一生懸命勉強するのよ……。約束よ」

「ああ、約束するよ」

「いい、……男の言葉はいったん口から出たら消えないのよ……」

光太郎は高校三年生になった。小泉京子は文京区に下宿して出版社に勤めている。帰省して光太郎の家へ真っ先に遊びにくると、東京の情報を母と話合っていた。母が京子に貸した「美徳のよるめき」など三島由紀夫の本を、返しにきた。実家に帰ってくる小泉京子は、垢抜けした東京の女になっていた。

谷口家の屋敷の庭先には道路が走り、屋敷の端から端までには六本の桜が植えられてい

た。一本一本の間隔は満開時、花々の端と端とが軽く接触する距離だった。夏場には幹に毛虫が這い蹲つくばっていた。枝から白い糸がぶら下がり止まった所で、蜘蛛が風に揺れていた。蝉のつんざく鳴き声の中で、蟻が蝉の死骸や桜の樹液を求めて黒い紐ひものように動いていた。所々毛虫に食われた木肌に、脂やが銚色の団子のように付着している。その脂が道路のあちこちに落ちていた。中央に木の門があり、祖父が亡くなってからは、父親が単身赴任で留守なので、一日の最後にかんぬきで門かど鎖さし固めるのは長男の光太郎の役目だった。

その日、母と小泉京子は楽しそうにお喋りをしていた。その昔、母は文化服装学院で洋裁の師範科で学ぶために、自分も本郷に下宿していたので、共通の風景を思い描いていたのだろつ。笑い声がときどき聞こえた。二人はその頃はまだ珍しかったインスタント・コーヒーを楽しみながら、尽きることなく話し合っていた。

「京子ちゃん、娘たちのピアノを見てやってください。それと、ちょっとでいいですから光太郎の英語を覗いてやってくださいね」

しばらくすると、妹たちの部屋から「子犬のワルツ」が聴こえてきた。昔、幼稚園児だったころの練習曲とは違い格段の上達だ。

曲が聴こえなくなつてしばらくすると、京子が、光太郎の部屋に、西瓜すいか四切れとお茶のお盆を持って入ってきた。

「よう、京子、しばらくだな」

「生意気に！ 恩師を呼び捨てにして。なによ、親父みたいな声出して」

「いつまでも子供扱いするな」

「おばさん言つてた。千葉大の医学部を受けるんだつて……」

「親戚に医者がばらばらいるからな。親父と御袋の顔を立てたんだ。俺としては芸大に行つて油絵をやりたいんだ。でも、絵描きは食べられないんだつてな。また、皮肉なものだ。芸大出ても学校の先生とか、自衛隊行きだつてな。芸大は、ちょっとやそつとじゃ入れないらしい。四年浪人して、まだ芸大を狙っている先輩の話を聞いて、その先輩のデッサンを見せてもらったけど、まさに天才だね。あの天才が四年浪人だつてんだから……」

「光太郎、あたし、あの辺り好きなの。芸大のある界限は、日本の気品みたいなものが静かに生き続けているわ。今度、東京へ来なさい。案内してあげる」

「あー、行く、行く。……芸大は魔法だな」

「国家試験に合格してから、決めるんだよ。俺、からきし、いくじなしなんだ。外科はだめだろうな。見ちゃったんだ、汽車轆くわかれた仏さん。人間は轆くわかれると本当に小さくなっちゃうんだね。線路脇でシートを被されて。集まっていた人から聞いたんだけど、去年の正月、鉄砲撃ちをしていた年配の男が、たまたま線路を挟んで反対側に自分の猟犬がいて、こつちへ来るように呼んだって。突然、汽笛が鳴って、ぶつたまげたんだって。汽車が煙を吐いて迫ってきているのに気付いたんだって。だから、主人は愛犬にその場に『伏せ、伏せ』って命令したんだって。でも猟犬は主人の目を見て吠えるんだって。汽車も汽笛を鳴らしたんだって。『伏せ』って絶叫したけど消えちゃったんだって。それで犬が渡るうとして線路中央で立ち止まっちゃうって動かないんだって。それで主人が両手を広げて、愛犬を守ろうとして……。D51だよ。雲のような蒸気を吐いて迫って来たんだって。汽笛が鳴って……。手術は出来ないな、俺は……。できれば、心の問題を扱って見たいな。人間の心を健康に見たいな……。でも、精神科の医者は精神病になっちゃうケースがあるんだって。病気を貰うんだよ、職業病だな」

「全般的に医学を勉強してから、何を専門にするか選ぶんでしよう」
「そうだよ」

「画集を見せながら、現実的に生活を真剣に考えている光太郎の横顔を見て、京子は逞たくましいものを感じていた。まず、理想より日々の現実をきちつと踏まえた考えは、女を安心させる。京子は、最近編み終えた手編みの赤いサマーセーターを着ていた。あの時、保健室で着ていたセーターと同色だが半袖で京子の両腕は細くしなやかだった。

光太郎は自然に両手を京子のセーターの下に滑らし、たくり上げ乳房を見た。

「京子、綺麗だな……」

鋭い眼光で、小泉京子の胸を観察していた。乳房は、曇りガラスから入ってくる光を吸い取っていた。

坊主頭を胸に抱き締めながら、京子が光太郎に、東京での暮らしを話し始めた。勤めは文京区で、出版社だから時間が不規則で、会社まで徒歩で通っているとのことだった。それから、一か月ぶりの新しい話題を話し始めた。日曜日には気分転換に入谷方面へ足を延ばし、「三四郎の池」や「樋口一葉」が住んだ跡地などを見学に行つて、昔日の文豪たちが散歩し、生活していた時代の空気を吸って来たなどと付け加えた。

六歳下の光太郎に露にされた乳房を、思い切り口で吸われながら、光太郎の体から伝わってくる男の力は京子の心を安心させた。光太郎の両耳を撫ぜながら頭を離して、目を閉じ光太郎の唇をまつた。閉じた瞼の上で不思議な光が回遊しているのを感じた。

「……モネの睡蓮を見るよ。湖面に這う、目に見えない崇高な光が徐々に見えてくるだろう……」と言った光太郎の唇に応じていると、自分の将来への不安が消えていくのが分かった。優れて心が晴れていった。

「俺の家は、東京に親戚がいっぱいあるんだぜ。こついつちやなんだが、東京は詳しいんだぜ。子供の頃から、母方の祖父に連れられて毎年、歳の暮れには東京の親戚に正月の餅を配りに行ってたんだ。あんまり、俺を田舎者扱いにするな」

「いつ、東京へ来るの？」

「俺、映画研究クラブに入ってるんだ。今度、先生と四人で『ベン・ハー』の研究のために東京へ行くんだ。銀座の『テアトル・東京』とか言ってたな。京子、俺、見終わったら自由行動なんだ。土曜日の夜だ。決まったら手紙書くよ」

机の脇には徳川家康の『東照公遺訓』の掛け軸が掛けてあった。気分がだらけたときに気合を入れるため、蔵から引つ張り出してきたのだ。

「人の一生は重荷を負って遠き道をゆくがごとし。いそぐべからず……」

映画研究クラブが東京へ行く日が来た。

土曜日、朝、久下田駅、七時二十八分着のディーゼル・カーをホームで待っていると、友人が打合わせ通り、窓から手を振った。すぐに分かった。真岡線、水戸線、東北線乗り継げば、上野駅に十時過ぎに到着する。

上野から地下鉄銀座線に乗り、銀座で降りた。先生は革靴を履いていたが、田舎の高校生三人は下駄を履いて、銀座通りを物珍しげにウインドーショッピングしながら京橋まで戻った。映画館はすぐに見つかった。館内に入ると、真つ正面の恐ろしいほど大きなスクリーンに圧倒された。ベン・ハーが上映されると、画面の英語の説明文が理解できた。

「キリストの物語」と翻訳できてうれしくなった。精霊が地上に降り、キリストが馬小屋で誕生する。青い夜空に星が輝やく神秘的な風景に、自分の心が何かを囁ささいているので不思議であった。世界史で習った、アレキサンドリア、メッシナ、カルタゴ、キプロス、ローマ、コリント、アテネ、フリジア、それからチャールトン・ヘストンが演じるユダヤ

王子の各代表選手が、馬四頭を御し大競馬場で九周する戦闘馬車の場面では、本当に目の前に馬車が飛び出して、頭上を飛び越えるかと思いい、肩をすぼめ光太郎はのけ反った。度肝を抜かれた。アメリカは凄い。いつの日かアメリカへ行くぞと誓った。

見終わって、それぞれは親戚の家に泊まり、日曜の二時に上野駅の中央広場で落ち合うことになった。光太郎は小泉京子の文京区の下宿に泊まった。

一年浪人して、谷口光太郎は千葉大の医学部に合格した。墨田区に、六畳、六畳、四畳半の三間ある家屋を借りている父親と同居し、ご飯作りと、掃除を担当して一年を過ごした。一緒に暮らしてみると、父の女の陰がはつきり見えてきた。で、別にアパートを借りて独立したい旨を母親に匂わせたが、その頃、すぐ下の妹の花梨が女子美大に合格しているので母からは、経済的に不可能だからお父さんと花梨と一緒に暮らして大学に通ってくださいと優しく諭された。母にはそれ以上逆らえなかった。

六畳は父親の部屋で設計台が置かれ、父が胡坐あぐらをかいて仕事をする。隣の六畳は光太郎の部屋である。四畳半の花梨の部屋とは襖ふすま一枚で仕切られ、花梨が高校生の時から使用している画架が立てられ二畳分の緑色のシートが隅に敷かれ、いつでも油絵が描けるようにカンバスが置いてあった。花梨がいない時、花梨の部屋を覗くと、むずむずとしてきて無性に絵が描きたくなった。

花梨は引越してきて早速、銀座松屋で眼鏡売り場のアルバイトを決めてきた。だが、光太郎はアルバイトを見つけない気になれなかった。五月が過ぎても集中できず、何となく大学へ行き新しい学問を学ぶ興奮も覚えず、ただ漠然と講義を聞いて時間をつぶした。終わると毎日いったん家に帰り、京子の下宿へ自転車で直行した。場所柄、安保反対のデモに集まる学生たちと遭遇し、危機を感じる時もあった。

光太郎が浪人時代から京子の下宿に入り浸りで、京子にとっては六畳一間の空間に光太郎が居ることが鬱陶うっとうしくなっていた。京子は個室が欲しくなった。窓に森林の模様のカーテンを掛けて、森の中のイメージを創造させてみたが、六畳は六畳でしかなく、勢い、ごろりと横たわる光太郎の存在は、大木が横たわっている風景だった。心にちくちく刺さるものを感じない訳にはいかなかった。

出版の仕事を覚えた京子は、東京の生活が学生時代を入れると六年を越えた。いつからか京子には漠然とした、将来に対する不安感が芽生えはじめていた。実家から、早く家に

帰って来なさいと催促されることも、その不安が焦燥感に変わりつつあることで認識するようになった。

その当時、郷里では、駅前大きな酒醸造所が採算が合わないということで事業をたたみ、敷地に建っていた倉庫、醸造蔵、離れの豚小屋が一掃されて、コンクリートで平され、跡地の中央にスーパー・マーケットと駐車場が建った。日が経つにつれて、商店街の主人の中には、店を妻に任せて、町から離れた工業団地へ勤めに出るものもあらわれた。

京子の不安感は、大型スーパーの出店で町の経済が一変し、実家の跡継ぎにさせられることであつた。それは、光太郎との別離を意味した。

昭和三十七年八月四日は土曜日であつた。三十七度六分を記録し、東京は三番目、一種のフェーン現象で近來珍しい猛暑であつた。京子は振り替えて会社が休みだつた。

目覚めて、二度寝して覚めると正午近かつた。京子と寝ていると、布団の敷布が汗で肌に張り付いていた。思考力が無くなり、放心状態で、口で喘ぎながら呼吸をしていた。半身を京子に被せると、触れた肌の汗が潰れて滑つた。

枕元のラジオを点けるとFENの放送が聞こえた。光太郎は家では日本語放送、京子の下宿ではFENを聞くと決めていた。十二時の時報がなつた。英語のニュースが流れた。

眼の前の畳の上を蜘蛛が一匹這つていた。子供のころの記憶にある母の声が聞こえてきた。

「昼間、蜘蛛が歩くのは縁起がいいのよ。殺しちゃだめよ……」

タオルで京子の汗を拭いてやった。我慢ができなくなつて光太郎は叫んだ。

「京子、裸体を描くぞ」

京子を全裸にした。高校時代に使っていた油絵道具一式は京子の部屋に置いてある。風呂敷から出した。今までに京子を、モデルにして三作品を仕上げている。第一目標は「日展」に入賞することだと決めていた。光太郎は墨田区の家に戻る途中、よく寄り道して上野公園でベンチに座つた。日展に出品する作品の、イメージ創りに没頭して、長時間を過ごすときもあつた。上野界限は自転車散歩コースに入っていた。途中で買ったピーナッツバターを塗つたコッペパンをゆっくり食べながら考えるのが好きだつた。

光太郎は全裸で、取り付かれたように京子を描き始めた。十五分もすると京子の肌全身に汗が吹き出てきた。その都度タオルで拭いたが、それでも京子の座る椅子の台座に汗が流れて尻の下へ消えていった。京子を立たせて台座の汗を拭き、今度はタオルを被せて座

らせた。

午後は日射が弱くなり、窓の両側をちょっと広げると風がよく通った。二人の顔が徐々に穏やかに変わっていった。光太郎の両足首へと伝わる汗が止まった。

「まじめに、お医者さんになってよね。あなたは長男なのだから。お医者さんになってからだつて画家になれるでしょ。そうじゃないと親戚の皆がわたしのことを破廉恥女、淫売婦扱いするじゃない。いいわね」

「京子、俺、ニューヨークへ行きたいな。コネがないとな」

「日展で金賞でも取ってからにしないさ。日本のゴッホさん！」

「京子、アメリカ行きの情報調べてくれよ。出版社つて何でもわかるんだろ。京子、ゴッホのベッドのある寝室の絵、見たことあるか。青みがかつた絵だよ。あんな部屋がニューヨークのS O H Oにはたくさんあるんだよ。ニューヨークへ一緒に行くか？ ニューヨークの日本料理店で人を求めている記事が出ていたな。京子、そこで働け。俺は将来有望な芸術家の卵だから、朝から晩まで絵を描いている。俺はおまえの色だ」

「……光太郎！ 真剣に言っているの？ 冷やかじゃないのね。ねえ、決心したの。さあ、どうなの。言いなさい」

「俺は医者には向いてないよ。外科医は俺にしてみれば肉屋だよ。町医者は、向う三軒、両隣が仕事の縄張りだろう。面白くないよ」

「町医者でなぜいけないの。フランスの医師、エリー・フォールは本業をしつかり努めながら、『美術史』を書き上げたのよ。編集長が言つてた、まさしく人々の心に残り感銘を与え続ける奇跡の本だつて。私も、その本をおばあさんになつても読めるように、フランス語を勉強始めようかと思って思っているの」

「俺は医者には向いていないよ」

光太郎は繰り返した。

難関で名の通つた千葉大の医学部に入学ができ、後は一心不乱に勉強し国家試験に合格して医師になる。いま、千葉大医学部を退学することは、この時代、よほどの変わり者でないと出来ない決断だ。

京子は、従来通りの光太郎との暮らしには決別しなければならないだろうと懸念していた。先が見えていた。しかし、二部屋あるアパートに引っ越せば、互いの独立した空間を

獲得出来て、煩わしさから開放され、光太郎を医者にする確信はあった。だが、その確信も揺らぎ始めていた。実家では父が小型トラックの荷台を改造して乾物を並べてお得意さんに行商を始めたからだ。

絵筆を置くと小休止だ。庭先の金木犀きんもくせいの葉を通して流れてくる風を抱くように、光太郎は窓を向き、目を瞑りつぶ喉を伸ばした。体の中から力が湧いてきた。京子を抱き締めた。

足元に「風来坊留学記」の単行本が転がっていた。著者はミッキー安川である。不思議なことに先程の蜘蛛くもがその本の表紙に居て動こうとしなかった。この本を一度読み、著者の行動力に衝撃を受けた。奨学金で学業を継続し、睡眠時間を削り、生活費を稼ぐため鍋を売るアルバイトをしながら目標に立ち向かう。差別社会のアメリカで堂々と生きていく働き、勉強し、命を縮めながらも頑張る行為に感銘を受けた。

光太郎はこの本に影響されて、アメリカに留学して絵を描きたくなったのだ。これまでにこの本を三回読破したが飽きさせない。読むたびに、自分自身の中に強く固まっていた「日展入賞」の決断が薄れていくのだった。わが身の目標が希薄していく理由はアメリカの「ベン・ハー」などの映画制作のチカラに脱帽したこともある。大競馬のシーンでは四頭の馬・馬車・御者が一体となって全九組が競馬場を疾走した。

「ようし、いつの日にか、あのアメリカへ行つてやる。そして、彼らの英語で、対等に渡り合つてやる」と、思うようになった。

光太郎は、アメリカの画家たちと深遠な芸術を語るには生涯、英語を勉強しなければならぬ、と考えていた。画業の道は諦めないで制作を継続していれば、現時点の画伯が確実に他界していくから、俺が長老になる順番が回ってくるはずだ、とうぬぼれていた。

花梨も父親も、小泉京子のアパートに光太郎が入りびたりになって医学の道から遠ざかろうとしている気配を感じていた。父親は自分の女の件があるから、息子の行状について強く意見することができない。他方、父親の心の底に沈殿している概念は「人間万事塞翁が馬」である。光太郎の医学への道には無言を通していった。

中国大陸の戦争で、戦友がばたばたと目の前で死んでいく風景を見過ぎたのだ。小学生の頃、光太郎は父の寢床にもぐり込み、中国の文化、彼等の発想、日常生活、観光地、大雑把な国の仕組みに関する話や戦争の話の話を聞くのが好きだった。

「鉄砲で撃たれて、戦友の腸はらわたが飛び出してるんだ。我慢しろ、すぐ治してやるからって励ましてな。なにしろ麻酔が無いだろ、両手両足を戦友がしっかり押さえつけて。彼氏、

絶叫してな。飛び出した腸を元に入れ直して、針と糸で腹を縫い合わせてやったよ。

……終わったぞ、生きて日本へ帰れるぞ、と言ってやると。うれしそうな顔をしてな。仏さんのような神かみしい顔になってな。『ありがとうございます。谷口上官、戦友たちよ。これで生きて御袋のところへ帰れるなあ。ありがとう……』って、やっと言ったな。傷口が痛かつたんだろ。次の日は美しい顔のまま死んじゃうな、ほとんどの場合……」

腸が飛び出した、素人の外科手術。光太郎の記憶の中でどのように発酵したのだろうか……。

花梨は、京子に小さい頃からピアノを教えてもらい本当の姉のように思っていたから、京子を話題に出すことは極力しなかった。

その年、冬休みが始まった頃だった。郷里では道路拡張をするため、桜の並木を切ることが可決されて、家の前の桜が全部切られてしまった。そんな内容の母からの手紙が届き、父は夕食時に白黒テレビを見ながら一氣にまくし立てた。

「馬鹿野郎が、今まで生きてきた命を簡単に殺す。桜の根っこが道路を壊すだと？ 馬鹿も休み休み言え。年に一度、桜が咲き誇り、奄美大島から北海道の天辺まで桜花が日本列島を清めることが何故分らない。あのデモ学生と同じだ。安保反対！ 安保反対！ 軍隊がなくてどうやって、自国の尊厳を護るのだ」

悲しいことに、切られた桜を追うように、母が脳溢血で倒れて体の自由が利かなくなり寝たきりになった。高校生になったばかりの末っ子の花恵一人では、病人の面倒を診ることができない。当座は、花梨が時間のある時、田舎へ帰って看病に努めたが、学校のこともあるので田舎の家を閉めることを父が決めた。病人の母と花恵が東京に引っ越してきた。それで光太郎は父と同じ部屋、花梨と花恵が元の光太郎の部屋に、母は四畳半で療養を強いられた。

一方、社内で京子との結婚をほめかす男性がいるにはいたが、京子の体内には光太郎の男のパワーが染みついており、それが京子の体に流れているという無意識の思いがあった。だから、その男との結婚を考える気にはなっても、深層では結婚を否定していた。これは京子の身体が、頭脳の知的な働きより正直で、京子自身の精神を、正しい方向に導いている証左であると思えた。自分の身体が望む選択をしていれば、常時、心が喜んでいる

のだ。だから、光太郎が医者への道を断つ決断をした時、安定志向のはずの京子の体が喜んでいたことから判断すれば、光太郎が画家になる決心は間違いではない、と思えた。

当然、親戚一同の猛反対は承知の上だ。京子は光太郎とニューヨークへ行くことに決めた。今までも二間のアパートを借りる余裕はあったが、京子は端から贅沢ぜいたくを嫌った。その日を境に、京子も光太郎も無我夢中で働き、夜は二人で水商売のアルバイトをして資金を蓄えた。京子の出版社は給料が割に良かったので十分貯金はできたが、それは無いものとして働いた。

それから、一年経った。

編集長には正攻法で正直に胸の内を打ち明け、光太郎の事も洗いざらい話した。真剣勝負の話し合いだった。結果、肩書だけニューヨーク駐在員事務所開設準備の目的で、編集長の英文の推薦状が功を奏したせいか、二人とも最終の胸部のレントゲン写真をアメリカ大使館の領事に提出し、宣誓してビザは下りた。出発の日取りは編集長以外、同僚にも言わなかった。

二人はそれぞれ、母親の脳溢血と父親の行商の問題に対峙していた。アメリカへ出発する日が一日つつ接近してくると、二人が親戚であることがしがらみになった。

上野の山は新緑に萌え、緑の風が渡っていた。京子は父親から手紙をもらった。

「明日五月五日、こどもの日に父と母が東京に来るんですって……」

「おじさんとおばさんが？」

京子の両親が投宿している目黒の雅叙園に、光太郎と京子は約束の夕方五時過ぎに到着した。光太郎は、京子と案内されて廊下を歩き、天井と左右の壁を見ながら胸の中に驚きを覚えた。この建物の建設に一助を担った昔日の画家達に足元を引っ張られる感じがした。日本画と浮き彫り彫刻、手の込んだ組子をもつ建具の見事なこと、高校時代、友達と自転車で日光へ行った時、東照宮で見た江戸文化の流れに似ているなど思った。まるで美術館だ。古の**仕事師**いしえの腕の優れていることを、建築に素人の光太郎は心の中で賞賛した。当時は名の通っていたに違いない職人がこのような作品を残している事実を知って、これからニューヨークで画家として芸術を求める若輩の自分にひとつの目標を与えてくれた、と思えたからだ。俺の絵も後世の人たちに、ひと時、楽しい時間を与えることができるかもしれない、しつかり画業に励まねばならないと肝に銘じた。

医者への道から脱線して画家になる俺を祝福はしない、おじさんとおばさんに何と挨拶すればいいのか？ 胸を掻き^{むし}りたくなかった。

「今日ね、上野の動物園へ行ってきたの。私たちの新婚旅行は上野動物園だったの」

京子の母が会席料理の晚餐の席で言った。光太郎は、気まずかった。どう切り出すか、考えていた。が、久方ぶりのご馳走で体が喜んで豊かな気持ちになった。周囲の温度が高くなってきて、京子の顔がほんのり桃色に染まった。

「おいしいわね、このお酒」

京子の額がほのかに輝いて、微笑が浮かんでいた。五月の風が、「金太郎池」を囲んでいる庭園の木々に触れているのが、ガラス越しに分かった。葉と葉が触れ合っている。金太郎池の水面に風の色が緑に染まり夜を写していた。見事な錦鯉の群れが悠々と風の色の流れに泳いでいた。

と、突如、京子の父親が座布団を外して後ろに下がると、光太郎の顔を見据えた。

「光太郎！ 京子を一生、かわいがってやってください。頼みます」

と、両手を付いて頭を垂れた。母親も座布団を外して、傍に下がり、夫に^{なら}做った。

数秒の沈黙があった。京子は胸が詰まった。光太郎は体が固まった。深呼吸を一回した。

「おじさん、おばさん、頭を上げてください」

父と母は同時に頭を上げ、光太郎の顔を見た。と、光太郎が額を畳に付けた。

「京子さんを一生、守ります」

京子は上気した顔のまま、胸が詰まり、顔を真っ直ぐにして両親を見ていた。視野の下に光太郎の後頭部が見えた。両の目から涙があふれ、頬を伝わった。

それからの四人は饒舌になった……。

「おとうさん、光太郎ちゃんと京子を送りましょう。わたし夜風にあたりたいわ」

玄関先から四人は夜空を見上げながら歩いた。父と母の下駄と玉砂利の音が足元から浮かびあがった。

「京子、これはお餞別です」

母は小さな風呂敷包みを京子に渡した。

「何ですか、お母さん」

「あなたがお嫁に行くときのお金です。すこしずつ貯えてたの……」

すぐに京子の母は、夜空を見上げていた。

「綺麗でしょう。夜の空って大好き。綺麗ね。新婚旅行の時の空と同じだわ。あの日、あなたはあの星から、わたしの腹おなかにやってきたのよ」
京子の母は誇らしげに言った……。

光太郎は京子の母親の横顔を見ながら「ベン・ハー」で見たキリストの降臨の夜空を想起していた。

出発まで一週間と迫った。光太郎は落ち着かなかった。だが、京子は平然として、部屋の後始末に取り掛かった。必要ないものはどんどん捨てた。光太郎はその仕事振りを見ていてなぜか自分の性格が新しくなり、心が軽くなっていくのを覚えた。

もともと、京子は必要以外のものは極力買ひ込まなかつた。見栄を張ることからは縁の遠い生活ぶりだった。家事が簡潔で幸太郎は京子を頼もしく感じていた。

「ねえ。いつご挨拶に行くの。おばさんと、おじさん、それから、花梨ちゃんと、花恵ちゃんに会いたいわ」

「行かなくていいよ」

「なんですって。ご挨拶に行かない気？ そんなこと許されないでしょ。わたしをおばさんに会わせない気。光太郎、ふざけるんじゃないよ」

光太郎の父は、母の四畳半の窓のない茶色の壁一面に、五十音仮名を墨で書いた化粧版を取り付けた。化粧版の幅で天井の左右に一個ずつリングが固定している。左右に一本ずつ紐が通してあった。右紐の先端に重しを入れて丸めた、布玉が縛つてあった。右の紐は「あ」から「お」まで上下に移動する。その右紐を「あ」行から「わ」行まで左右に移動させるために、左紐の先端にステンレスのリングが取り付けられ、中に右紐が通っていた。二本の紐の端は母のベッドの手元左右に縛つてあった。

「京子おねえちゃん。どうして遊びに来てくれなかつたの」

花恵がべそをかいて、京子に抱きついた。京子はされるがまま何も言えなかつた。花梨と父親はすき焼きの準備を完了している。元の光太郎の部屋に卓袱台ちやくぶたいが持ち込まれ、その上にガスコンロが置かれ、青いビニールホースが台所から引かれていた。

父は襖を開けて、妻の顔を今宵このたびの宴の全体が見えるように枕を動かし、顔をこちらに向けた。

「送別の辞しやく、私たち姉妹は光太郎ちゃん」、花恵が「お兄ちゃん」、花梨と花恵で「が

ニューヨークへ行くにあたり、少しも心配しておりません。それは京子おねえちゃんがそばにいるからです。ふつつかな谷口家の長男ですが、京子おねえちゃん、よろしくお願いいたします」

「はい、分かりました。お兄ちゃんが画業に専念できますよう、謹んでお引き受けいたします」

「では、長女の私^めが、乾」

「待て、その前に一言……。花梨、花恵、お母ちゃんをよろしくお願いします」

と、光太郎が言った。

間髪を入れず父親が、「心配無用。生^{なま}を言うな。お前たちのお母ちゃんは俺の女だ。ばっきやろー」

「乾杯！……京子おねえちゃん、わたしもニューヨークへ行きたい」

「だめだよ。また、わたし、一人になっちゃうでしょうよ。大学卒業してからにしてよ」と、花恵が花梨の顔に強い視線を向けた。

「あの絵、実家の絵でしょ。桜が満開で綺麗。花梨ちゃんが描いていたよね。桜全部切れちゃって……」

「五十音字版」の上の欄間に飾られた絵を見て京子が言った。その横には父親が描いた、母が通った女学校から見える筑波山の絵が添えてあった。

京子は実家の道路の反対側で、満開の桜の根元で一心に遊ぶ光太郎の子供時代を想起していた。午後九時過ぎ、宴はお開きになった。

京子は母に寄り添い「おばさん行ってきます」と耳元で話した。が、母の下唇は一度動いただけだった。母が何を言いたかったのか……判別できなかった。京子は自らの左の耳を母の口に付けた。花梨と花恵の顔に笑みが見えた。母のベッドの傍に全員で立った。

母は左右の手に紐を絡ませていた。沈黙が続き、時間^{ゆめゆめ}が緩緩と流れた。

きよこちやんうれしい

出発の前夜、京子は動揺のかけらも見せない。京子は大家との契約を済ませた。身の回りを整理した。光太郎と二人だけで、買ってきたカッサンドとワインで、アパートでささやかな祝宴をはっていた。珍しいこともあるものだ、大家が電話たと言っ。

脳溢血は伝染病なのだろうか？ それとも切られた桜の怨念を、京子の父親は受けたのだろうか。空家の谷口家の反対側に乾物屋を構える京子の父が倒れ、危篤^{きとく}だという……。

部屋に戻るなり、京子は国鉄の時刻表を見た。上野駅発午後八時三十分の汽車に乗れば小金井には十時五分に到着する。階下の大家に電話を借りて、車で小金井まで迎えに来てくれるように実家に連絡を済ませた。

京子は泣きじゃくった。光太郎の胸で泣くだけ泣いた。泣き疲れて目^は腫らしていた。光太郎も京子を抱き締めながら泣いた。ニューヨークでの、画家修行の自分自身の姿を想像しながら泣いていた。

「延期しよう」

京子は開き直った。

「光太郎、医者になると一度言ったわね。あの時は高校生だったね。未成年だったからいいの。光太郎、画家になるってはっきり言ったわね。成人した王子さまの言葉は一度口から出たら、消えないのよ。後から行くから……。泣き虫。男でしょ。何のために、二人で『三度勝つ』を食べたの！」

窓を開けた。夜は新緑だった。樹木の新芽が闇を吸い取って微かに光っていた。風が薄い帯になって蠢いていた。

京子は光太郎を裸にした。光太郎は京子を裸にした。

夜行列車に乗せるため、自分の自転車に京子に乗せて上野駅へ送る途中、喉で泣いていた。不忍池の水面に星が光っていた。

京子は乗車し窓を開けた。ホームに立つ光太郎に言った。

「光太郎が『ダイアナ』を歌った時、わたしが先生を辞める時、『世界へ飛んで行きなさい』って皆に言ったわね。約束したでしょう。今、行かなきゃだめ……」

昭和三十八年五月十五日の午後だった。

羽田空港から日本航空のプロペラ機が離陸すると直ぐに、光太郎は雲の下に見える風景から判断して筑波山を探したが見えなかった。筑波が見えれば自分の郷里の方角が定まる。一心不乱に探していた。そこには京子がいる。母のいる辺り隅田川はどこだ。小松川は？見えなかった。次に、虚脱感でどうしたらいいのか分からなくなった。なぜいま、俺は飛行機に乗っているのだ、と問いかけた。それは、京子の肉体が、自分にニューヨークへ絵の修行に行かせる気力を充電させたのだ、と納得させた。京子が隣席に居ないことで俺の

希望の半分がもぎ取られ、俺の旅立ちは片肺飛行になった、と思わざるを得なかった。

「京子、早く、来てくれよ……」

涙が溜まり、鼻水が流れてきた。京子の編んでくれた真っ赤なサマーセーターを着ている光太郎は両腕を泳がせ、空気の京子を抱き締めた。

その頃、長女の京子は近々、父の葬式を出すに当たって母から相談を受けたところだった。この状況になつては、どうしても小泉家の乾物屋を再建させなければならない、と考えていた。何年かかるのだ。近くの大型スーパー・マーケットへ蟻のように集まる客を横目で見ながら、父の残した行商を続けなければならない。小さい店には小さい店の経営戦略が在るはずだ。商売替えしてもいい。しばらく様子を見て勉強していこうと考えた。

父の使っていたトラックの荷台に、ホースで水を吹きつけ掃除をした。筑波山上空に、飛行機雲が白く刻印されながら伸びている。

「何年かかっても再建させてみせるわ。商売替えするのも一策だわね。光太郎、おまえはわたしの色だということを忘れたら殺してやるからね。わたしはどんなことが起ころうとも怖くないわよ。一人じゃないもの……」

と、京子は天空を見上げて呟いた。飛行機雲をめがけて左手でホースを握り空へ水を吹きつけた。薄く虹が浮かんだ。右手を伸ばし太陽の光をすくい取り、自分の腹部を愛でながら何度も撫せていた。

京子の顔は凜として、新しい命の誕生に喜び輝いていた。

終り。

タイトル 砂山

氏名 保坂 治良

ペンネーム 二宮 英郷 にのみや えいこう

住所 〒150・0011

東京都渋谷区東2 20 13・602

電話・FAX 03(5469 0515)

職業 教師

略歴 昭和十七年五月十五日 栃木県生まれ 六十二歳

社団法人 国際農業者交流協会 米国派遣 3年制

カリフォルニア農業研修生修了。

駐日メキシコ大使館 領事部 勤務、

同メキシコ総領事館(セクレタリー・ジェネラル)に20年余
勤務後退職。

TV局で音声多重に従事。東京スクールオブビジネス、東京YW
CA、お茶の水外語学院専門学校などで主に英語全般を教える。

その間、短期に民間企業で広報部の仕事に従事。

現在、青山アカデミー英語塾 主宰。

青山学院大学大学院法学研究科博士前期課程終了。

同大学院MBAコースで学ぶ。

原稿枚数 400字詰 五十五枚